

ドクター和の



臨終回巻

東京オリンピック・パラリン

ピックまで、あと2年を切りま

した。

私が診ている在宅の患者さんにも「次の東京オリンピックまでは死なれへんわ」と張り切つている80代、90代の人が多くいます。前回（1964年）の記憶に残っている人の方が、どうやら来年への期待も大きいようです。そういえば先日一周忌を迎えた日野原重明先生も「オリンピックまで頑張りますよ」と仰っていたので、残念でなりません。

プロレスラーのマサ

斉藤さん。この人にも来年まで生きていてほしかった。というのも、マさんは、前回

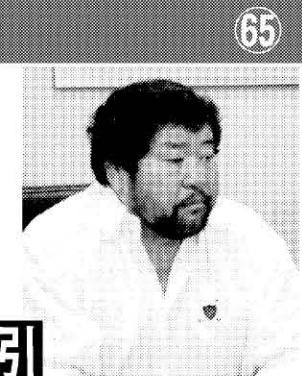
東京オリンピック・パラリンピックまで、あと2年を切りました。

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

もしくは、一昨年亡くなつたプロボクサーのモハメド・アリさん（享年74）のことを思い浮かべる人も多いのではないか。しかし、アリさんの直接の死因は「敗血症」でした。

認知症と同じく、パークリン病は闘病期間がとても長く、徐々に全身の機能が弱っていく病気です。私の場合、死亡診断書にパークリン病と書くことは少なく、直接的死因として誤記が多いかもしれません。

ただ、多剤投与やパークリン病の薬が多すぎて症状が悪化している人が少なくないのであります。薬のせいで認知症と似た症状が出ている人もいます。重度の人が私の外来に来た場合、まずどんな薬が処方されているかをチェックします。



65

マサ斉藤

しかしその夢は叶うことなく、7月14日に逝去。75歳でした。パークリン病によつて死亡、との発表です。パークリン病で死ぬということ…ピンとこない人が多いかもしれませんね。

パークリン病は、脳の中にあるドパミン神経が脱落していくことで、歩行や日常生活に支障をきたしていく病気です。手足の震えや動作が遅くなることで、病気に気づく人が多いです。ダンスなどのリハビリ療法が有効です。

いくつかの薬が存在しますが、どれも進行を遅らせるためであり、完治するための薬はありません。

引退後も長い長い闘い続け

「逃げない」貫く

が、どれも進行を遅らせるためであり、完治するための薬はありません。

1987年、アントニオ猪木との「巣流島の戦い」同様に、長い闘いでした。一流選手の証とは「逃げない」ことかもしれません。